



11月15日

ケーブルテレビ特別番組、収録中の栗市長

ごあいさつ

平成29年12月5日

今年も12月、師走を迎えました。師走という言葉の由来はさまざまあるようで、この時期に家々で師（僧侶）を迎えて読経をあげる仏事があったため、師が東へ西へと走り回る「師馳（しは）せ月」からという説もあるようですが、由来に関係なく年の瀬を迎え、やり残したことはないかという気持ちが、さらにあわただしくさせるのかもしれない。

「BIG APPLE in NONOICHI」や、「ふるさと交流会 in 東京」など、恒例の秋の事業もつつがなく終了することができました。今年のBIG APPLEは、久しぶりに綾戸智恵さんにもお越しいただきました。長く続けてきたことにより、年々いい意味での蓄積ができていくことに加え、その年その年の新しい企画により、さらに深さが増していくように感じております。ジャズに限らず、いろいろな分野の音楽に関わっている方が多く、それを通しての厚みのある場所が野々市ということになってきたのではないかと思います。このような形での発信も市の財産となります。

ふるさと交流会では、多くの皆さんにご参加をいただき、会場のあちこちで交流の輪ができていました。米林宏昌監督もお子さんを連れて会場にお越しになられ、ごあいさつをいただきました。監督の人間味あふれる部分も垣間見られたようで、改めてあのような作品を創り上げられることが理解できるととてもいい機会となりました。

開館して一ヶ月が経つカレードは、とても良い施設との評価もいただいているようで、予想以上に連日多くの方々がお越しになります。「学びの杜ののいち カレード」は文化交流拠点施設であり、これから整備をする地域中心交流拠点施設、どちらにも「交流」という言葉がついています。ヒトとヒト、ヒトとモノ、これらが交流するところを創りたいという思いと、「拠点」と「拠点」を結びつけた「線」から、それをさらに「面」へと広げ、市民の皆さんの交流、発信の舞台を創り出したいと思っております。

「野々市版コミュニティ・リビング」創出プロジェクト、野々市中央地区整備事業は、市民の皆さん自身が市民協働のまちづくりにご協力いただき実践され、さらには拠点の整備をすることで野々市が豊かであることが感じられるのではないかと思います。自分が生活している場や、その環境に自信を持っていただくことが結果的に野々市を発信していただくことにつながっていくと考えています。

11月30日には早く感じられるかもしれませんが、来年開催する椿まつりの実行委員会が開かれました。今年3月の全国椿サミットの余韻を形にするため、主会場の文化会館と、ののいち椿館・椿山との間にシャトルバスを運行する予定です。これも「拠点」と「拠点」を結ぶことを考えて、椿まつりの拡大になるかと思えます。市全体に花と緑が広がる、この期間、野々市は椿まつり一色に染まる、というのが大きな夢です。

一年の始まりと終わりを「始末」という言葉で表現するならば、終わりよければすべてよし、となりますが、まちづくりに終わりはありません。来る年も、市民の皆さんのご活躍とご健康をお祈り申し上げ、引き続き野々市市へのご支援のほど、よろしくお願いいたします。